

再びその人らしい生活に

ふれあいひろば

2018年 秋号 Vol.86

愛仁会リハビリテーション病院

三島圏地域リハビリテーション
地域支援センター



- 住所：高槻市白梅町5番7号
- 電話：072-683-1212
- URL：http://aijinkai.or.jp

- 1面 JRAT活動報告
- 2面 コンサート開催報告・次回開催のお知らせ / (連載) チーム医療活動のご紹介⑥褥瘡回診
- 3面 地域クリニックとの連携の中で②
- 4面 患者さまだより② / 在宅サービスセンターだより

大阪JRAT

大規模災害リハビリテーション支援関連団体協議会



活 動 報 告

愛仁会リハビリテーション病院 大垣 昌之



2018年6月18日7時58分大阪北部を震源地としたM6.1の地震が、職員の通勤時を襲いました。当日は、患者さんの安全確保や、通勤困難者対応などにバタバタした一日でありましたが、翌19日からはライフラインはすべて復旧し、診療活動に大きな影響はなかったのは幸いでした。

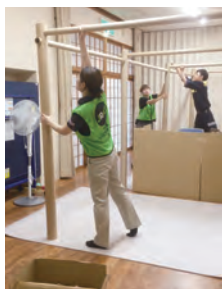
しかし、高槻市、茨木市では発災直後より、家屋の倒壊や、余震の影響で避難所生活を余儀なくされている方が数多くおられ、JRAT (Japan Disaster Rehabilitation Assistant Team: 大規模災害リハビリテーション支援関連団体協議会) の要請を得て、愛仁会リハビリテーション病院が活動本部となり大阪府下より医師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、延べ43人の方々が、高槻市、茨木市の被災地支援を行いました。愛仁会リハビリテーション病院から竹井理学療法士、畠田理学療法士、岡本理学療法士、大垣が、高槻病院からは山木理学療法士が被災地活動を行いました。避難所での不自由な生活が長期化しますと、活動性が低下し、身体が動かしくくなります(生活不活発病)。高齢の方は特に注意が必要です。避難所で行う内容としては、①避難所生活を余儀なくされている方の生活不活発病の予防、②避難所内の安全性や活動性が損なわれないような住環境の提案および設定などです。行政や各団体の迅速な対応により高槻市、茨木市の避難所は随

分整理され、平時の医療・介護事業所も復旧していることから、大阪JRATの活動は6月24をもって終了となりました。翌6月25日からは、三島圏地域リハビリテーション支援センターである愛仁会リハビリテーション病院が、被災地のリハビリテーション支援活動を引き継ぎました。在宅支援科の山口理学療法士を中心として継続的に避難所の支援活動を行い、7月4日には地域保健師へ引継ぎ、活動を無事に終わることが出来ました。今回の避難所支援をするにあたり、日々保健所の職員や、保健師との関わり(顔の見える関係)がずいぶん役に立ちました。改めて、平時において地域との関係づくりの重要性を感じました。

7月には西日本豪雨により、広島県、岡山県を中心に多くの方が避難所生活を余儀なくされました。8月13日～16日の4日間、愛仁会リハビリテーション病院から竹井理学療法士、岡本理学療法士、高槻病院から山木理学療法士が、大阪北部地震での災害支援での経験を生かして岡山県倉敷市真備町で避難所支援活動を行いました。

愛仁会リハビリテーション病院では、過去に東日本大震災、熊本地震において、災害リハ支援を行ってきました。私たちの生活する町で、まさかこのような大きな災害が起こると思ってもいませんでした。過去の災害リハ支援の経験が、大阪北部地震、西日本豪雨での支援活動に活かされたと思います。

リハビリテーションとは、『機能訓練』という意味でとらえられがちですが、真の意味は『復権・再建』であります。被災した地域復興や、被災した方々の生活再建がリハビリテーションそのものであります。被災地の一日も早い復興を願います。





C O N C E R T

* 第 2 回 *

ヘルマンハーブコンサート開催♪



8月29日(水)に、リハ病院3階「ふれあい広場」にて当院では2回目のヘルマンハーブコンサートが開催されました。ヘルマンハーブとは、1987年ドイツでヘルマン・フェー氏により ダウン症の息子さんのために、自ら楽器を奏でることを通じて生きる喜びを味わってもらいたいとの一念から作られた弦楽器だそうです。

当日のコンサートは、とても優しく美しい音色からはじまり、中盤には患者様も一緒に手拍子や歌を口ずさんだり、とても楽しく参加されていました。また、初めてヘルマンハーブの演奏を聴かれる方も多く、繊細に演奏される演奏者の方の姿に惹かれる患者様の様子が大変印象的でした。会場内は、差し込むデッキ側からの光がふんわりした空気を演出し、会場全体が一層心地いい空間となりほんとうに心から癒される最高のコンサートでした。



平成30年12月12日(水)には**クリスマスコンサートを開催**しますので、ぜひお越し下さい。

(連載) チーム医療活動のご紹介⑥

褥 瘡 回 診

5階東病棟看護科長 仁島 由美

褥瘡、いわゆる床ずれは、皮膚が長い時間圧迫されて血流が悪くなり、その結果、皮膚や皮下組織、筋肉などへ酸素や栄養が行きわたらなくなり、細胞が壊死した状態になることです。自分で体の向きを変えられない方や、痩せている方、車いすに長時間同じ姿勢で座っている方などに褥瘡ができるリスクがあります。できやすい場所は、おしりの中央にある仙骨部が最も多く、踵やくるぶしにもできることがあります。初期は圧迫を受けた皮膚が赤くなり、や



がて皮膚が破れてただれ、液がにじみ出たり膿が出てきます。さらに悪化すると皮膚が黒ずみ傷口がさらに深くなり、全身的な感染を引き起こすこともあり注意が必要です。病院ではリスクがあ

る患者さまに、圧を分散させる電動マット

や車いすのクッションを使用し褥瘡予防に努めていますが、まれに褥瘡が発生してしまうことがあります。また、前の病院で褥瘡ができて治らないまま当院に入院される患者さまもおられます。褥瘡が発生したら悪化しないように直ちに適切な処置を行う必要があります。当院では毎週水曜日褥瘡回診を行っています。回診メンバーは、医師、看護師、管理栄養士、理学療法士、薬剤師です。患者さまの病室にうかがい、褥瘡の状態にあわせた軟膏や貼り薬を選択し早期治癒をめざします。褥瘡が発生した原因を多職種で話し合い、今後発生しないようにするための方策の検討も行っています。褥瘡はできてしまうとなかなか治りにくいものです。今後も褥瘡予防に努めていきたいと思ひます。





川口脳神経外科 リハビリクリニック

〒573-0086 枚方市香里園町9-25-202
TEL.072-835-1010

患者様の退院後、日々の診療でお世話になっている、川口脳神経外科リハビリクリニック
川口琢也院長にインタビューさせていただきました。

Q 開業されたきっかけを教えてください

A 元々は関西医科大学の出身です。脳神経外科に勤務している中で高次脳機能障害等の疾患を抱える患者さんの退院後を支える場所がないと感じることが多く、開業することに至りました。

Q クリニックの特徴を教えてください

A 『社会に戻ることができるように』を一番のコンセプトにしています。大きな病院の脳神経外科で「大丈夫」と言われてしまった患者さんが、実際に社会に戻る際に必要となる自立就労支援を提供していくために、気になる部分にアプローチをしています。この部分には今後も力を入れて取り組んでいきたいと考えています。MRIを設置している所も特徴の一つです。

Q リハビリに関して教えてください

A 医療保険や訪問リハビリでは、1回1時間でマンツーマンでの個別リハビリを行っています。通所リハビリも少人数で、しっかりとマンツーマンでの個別リハビリの時間を取るようにしています。



川口院長ありがとうございました。クリニックは明るい印象で、スタッフの方々にも丁寧に
ご対応いただき、安心感を持ってました。

当院を退院され、社会生活に戻られる患者様のサポートをしていただいておりますが、引き続き連携を深めていくことができるよう努めて参ります。今後ともよろしくお願ひ致します。

診療時間	月	火	水	木	金	土
9:00~12:00	○	○	○	△	○	○
16:00~19:00	○	○	○	—	○	—

△:予約診療 【休診日】木曜午後・土曜午後・日曜・祝日



*京阪「香里園」駅から徒歩約3分

*駐車場:ロイヤルプラザ(半地下)9台分
当院より約100m(注意)高さ1.5m制限あり



▲川口 琢也院長

INTERVIEW
患者さまだより⑳
インタビュー

Kさん (70代・男性)

Kさんは今年の冬に脳梗塞を発症し、右半身麻痺、失語症、高次脳機能障害が後遺症として残りました。リハビリテーションを経て、下肢装具と杖により歩行が可能となり、顔きとはい・いいえでコミュニケーションも少しずつ取れるようになりました。結果、住宅環境と介護保険サービスの調整を行い、入院から約4ヶ月後に自宅に退院されました。今回はご本人と奥様に現在の様子についてお伺いさせていただきました。

ご本人 (笑顔で) うん。

奥様 退院してからデイケアに週3回通ってます。そこで歩く練習中心にリハビリしています。わからないこともありますけど、何とかやっていますね。孫が土日に家に来た時に、一緒に遊んだり、一緒に字を書いたりして孫が採点するっていうことをしてて。それはそれでリハビリかなって思ってます。入院中は大丈夫かなってずっと不安でした。帰ってきた時夜のトイレとか、転ばないか心配してましたけど、今も転んでないです。トイレも器用に行ってて、自分で行って部屋まで帰ってこれます。最近はお米洗ったり、洗濯物畳んだり。あと掃除機かけようとしてびっくりしました。涼しくなってきたから、そろそろ散歩もしようと思ってます。

入院中にご本人、奥様の表情が険しいこともありましたが、自宅では笑顔で話して下さいました。ご本人に自宅は良いですか?と伺うとさらに笑顔で「うんうん」と頷いておられたのが印象的でした。またご本人、奥様の様子を見ていて、慣れ親しんだ在宅での生活には力があるのだと改めて感じました。今回は貴重な時間を頂きありがとうございました。



愛仁会高槻 在宅サービスセンターだより

退院当初は足元のふらつきや倦怠感があり、食事量も少なく、低血糖症状が出ることもありました。今は、奥様のサポートで、血糖測定やインスリン注射も欠

かした。もともと『世界一愛妻家』のTさんは、『元氣に居られるのは奥さんのおかげや』この人(奥様)がおらんかったら、とても退院はできなかった」と、毎日奥様への感謝を伝えておられます。私達の訪問時に、優しく見詰め合うお二人の姿を見ていると、ほのぼのとあたたかい気持ちになります。

Tさんは今年の3月、糖尿病の治療中に脳梗塞を発症されました。自立した生活を取り戻すため、4月に愛仁会リハビリテーション病院に転院し、運動機能や言語機能訓練を受けながら、血糖測定やインスリン注射の方法を練習され、6月によりよく自宅退院となりました。



訪問看護ステーション愛仁会高槻 **藤崎 雅子**

かさず行なえています。食事目標カロリーを摂取できるように、同時に体力、血糖値も安定し、回復してこられました。デイサービスが週2回から3回に増やせたことを機に、訪問看護の回数を毎週1回から隔週1回に減らし、ますますお元気にご家族での外出など楽しんでおられます。暑い夏が終わり、良い季節になったので、ご友人とのカラオケや奥様との散歩など、入院以前の生活を送りたいと話しておられます。愛情いっぱいのお二人らしい毎日、これからも応援したいと思います。